

登山専門部猪瀬委員長への質問

平成29年9月10日

登山専門部猪野委員長に質問させていただきます。第一次報告書で指摘された内容については既に要望を出し今回説明いただいておりますので、それ以外のことで質問をさせていただきます。

私たちは、この雪崩事故がどうして起こってしまったのか、何が足りなかったのか、どうすれば回避することができたのかという根本的な疑問に対する回答を求め続けています。

検証委員会第一次報告書、国立防災科学技術研究所の現地説明会、生徒たちの証言などを基に、私たち自身が検討を重ね、いくつかの「確かなこと」にたどりつきました。そのことを基にして質問をさせていただきます。

すでに説明会の中で回答いただいた内容への質問もあるかと思いますが、事前に作るためにそのような重複もできます。質問は遺族等の切実な気持ちですので誠実なご回答をお願いします。

《私たちにとって確かなこと》

- 1 本件の講習会は、積雪期登山の正しいあり方と安全登山の知識・技術を習得し、登山事故防止を目的にしている。登山の事故防止を学ぶ講習会で、絶対に起こしてはならないのが死亡事故だ。しかし、訓練の場で雪崩事故に遭遇し、8名の尊い命が奪われた。この死亡事故の事実を、講習会の主催者である高体連は、真摯に、重く受け止めなければならない。そうしなければ8名は救われない。
- 2 雪崩に遭遇するかどうかは、人間がそこにいたかどうかだ。雪崩の発生原因の問題ではない。雪崩回避は、そこに入るかどうかの人間側の判断の問題だ。
1班から4班までが雪崩に遭遇した。回避ができなかった。1班は8名が存在と未来を一瞬にして奪われる、想像を絶する痛ましい結果になった。
当日あの現場に行くことを決めたのは指導者の判断だ。生徒ではない。雪崩回避ができなかったのは、指導した登山専門部役員と各班講師の状況理解と判断が間違っていたからだ。
- 3 危険を知らせる情報はたくさん出ていた。気象予報も、その日の気候も、地形的条件も、積雪量も、雪の状態も、視界も、これらの全てが、雪崩の危険を知らせる情報を指導者に送っていたが、正しく受け止めることができなかった。その結果雪崩を回避する機会を逃し、雪崩に巻き込まれてしまった。
- 4 様々な雪崩情報に接しても、正しく危険性を受け止められなかったのは、感性が鈍くなっていたからだ。感じ取れなかったから、安全だと盲信し、雪崩事故の現場に入っていった。
茶臼岳登山を中止したことで危険を回避できたと思い、基本的な安全確認や情報収集をしなかった。各班講師は、情報から雪崩の危険性を感じ取ることができなかった。感じ取れないから、漫然と安全だと信じ込み、雪崩の現場にキックステップで登ってしまった。

5 大雪注意報、雪崩注意報が発令されている中、ラッセル訓練を実施した指導者の判断は間違いだった。

あの日、平地でも寒く雪が降っていた。大雪や雪崩注意報が出ている中で、冬山装備も十分でない状態で、なぜ、普段使ったこともない危険ルートに登り、結果的には登山と同じような訓練を行ったのか。なぜ「止める」という考えが起こらなかったのか。万が一のことをどうして考えられなかったのかなど、指導者の認識と判断の甘さに強い憤りを感じる。

6 訓練時、各班講師は本部との連絡や講師間の連絡をしていない。相互チェックや助け合う関係がなかった。このことが危機判断を遅らせ、被害を大きくした。

7 ラッセル訓練に計画を変更し、雪崩の危険のある斜面に入ることを決めた指導者たちには日々の生活がある。指導者の言を信じた生徒の多くは若い命を散らした。何てことだ。どうしてこんなことになったのだ。

遺族は突然悲しみの底に落とされた。悲しみの底はかすかな明かりさえ届かない、出口のない谷底だ。当たり前前の日常を取り戻したくて、どこに向かっていけばまた息子に会えるか、暗い底でいつまでも考え続け、迷い続け、泣き続けている。

《登山専門部猪瀬委員長への質問》

1 雪崩の危険性の認識について、お聞きします。

(1) 講習会の活動場所（ゲレンデ・樹林帯・茶臼岳）における雪崩の危険性について、どのような考えをもっていたか。その考えの根拠になっているのはどのようなことか。

(2) 樹林帯での活動と雪崩に遭遇する危険性について、どのような認識をもっていたか。

(3) 樹林帯の先、天狗の鼻までの樹木のない雪面での雪崩の危険性について、どのような認識をもっていたか。

(4) 雪崩が起きる可能性がどの程度あるか、何で判断をしていたのか。

(5) 今回の積雪（証言や記録により違っているが）では、茶臼岳で雪崩がおきる可能性をどの程度あると感じていたか。

(6) 気象情報の収集について、委員長はどのような考えをもっていたか。また、実際に、いつ、どこから、どのような気象に関する情報を得ていたか。

(7) 今回の気温の変化と積雪は、どのような場所で雪崩を引き起こすと思っていたか。

5/28の説明会の回答で、今回の27日までの気温の変化と積雪により、雪崩を引き起こす可能性が増すことを知っていたと回答している。具体的には、どのようなイメージ（どのような場所で雪崩が起きやすくなると）をもっていたのか。

(8) 大雪注意報、雪崩注意報については、いつ知ったか。そのとき何を感じたか。どのように指導者に伝えたのか。

(9) 委員長としては弱層テストの実施について、どのように考えていたか。

弱層テストについて、指導者が全員集合した中で実施し評価することが必須であると思う。積雪期の安全登山ということからも、実践的研修にもなると考えている。

(10) 朝の実技講師打ち合わせのとき、ラッセル訓練で登る樹林帯とその上の雪面について、危険性はどの程度考えたか。

事前調査、積雪量、地形的条件、天候の変化等が雪崩の条件を満たしていたと分かっていたので、第2ゲレンデ奥以外で、雪崩発生の危険性があると考えていたところがあったか。

(11) 第1次報告書の後の聞き取り調査で、「滑落だけは心配した。雪崩ということを心配した人は一人もいない。」と、検証委員会委員長は説明した。猪瀬委員長は、雪山登山を計画しているのに、滑落は心配したが雪崩は心配しなかったということか。

- (12) 滑落を心配して茶臼岳登山を中止した。ラッセル訓練でも滑落を心配したということか。
- (13) 5/28の説明会での質問で、27日まで気温の変化と積雪により、雪崩の可能性が増すことを知っている」と回答している。知っているのに雪崩ではなく滑落を心配したということか。
- 2 ラッセル訓練への計画変更の判断について、お聞きします。
- (1) 登山中止の判断は、どの時点で浮かび、どの時点でほぼ確定されたか。
- (2) 登山中止を決断した最も大きな理由は何か。大雪注意報や雪崩注意報についてはその時点で認識していたか。
- (3) ラッセル訓練の提案があったとき、委員長の考えと一致したか。
- (4) 登山中止の後、委員長は、どのような選択肢を考えたか。ラッセル以外にも何か考えたのか。
- (5) ラッセルとは、どのような行為か。それは、どのようなときに行うのか。
- (6) 何のために登山の代わりにラッセル訓練を行うのか。
- (7) ラッセル訓練を2回行うのは高校生にとってどのような意味をもつのか。
今回の山講習会で26日と27日と、2回も実施することになった。
- (8) ラッセル訓練で樹林帯の中を登っていくことは、委員長は想定していたのか。
- (9) 樹林帯を抜けて登っていくことは、想定していたのか。
- (10) ラッセル訓練の場として樹林帯とその先についても、3名とも想定していたか。
- (11) ラッセル訓練の場所として「グレンデの安全な場所」という言葉を渡辺前委員長は証言しているが、この表現は3人の協議や事前講師打ち合わせの中で使われていたか。
- (12) 「グレンデの安全な場所」には、樹林帯もはいるのか。
- (13) 「グレンデの安全な場所」には、樹林帯の先もはいるのか。
- (14) 「グレンデの安全な場所」という表現は、その後、講師打ち合わせの場面で、全体に周知されたか。

(15) 登山中止の最も大きな理由が、積雪等による雪崩の危険性であったとすると、ラッセルで地元山岳関係者も登らないルートに登っていったことは、登山中止の判断と矛盾する行動であると思うが、ラッセル訓練への変更を決断した時点で、このような考えはなかったのか。

(16) ラッセル行為で弱層のある雪板に入ることは、弱層に重みや刺激を与え、バランスを崩して雪崩を誘発すると考えられるが、ラッセル訓練に計画変更を決めたときには、そうした認識や危惧は持たなかったのか。

(17) 講師打ち合わせ後、ラッセル訓練で、各班がどのような場所でどのようなコースを進むか、どの程度把握していたか。

講師の性格や生徒の体力などからある程度予想できたか。樹林帯の中を進むことに心配はしなかったか。

(18) 計画変更の話し合いは、現場で外の状況を見て感じながら、決めるべきでなかったのか。

27日の朝、計画変更の相談は携帯電話で行ったと証言している。現場の責任者としては、現場（樹林帯が見えるところ）まで行き、積雪や風や視界や降雪の状況を自らの五感で感じとり、二人と意見交換をしていく中で最終決定を行う方が、安心だと思うが、なぜ携帯電話による相談の形を取ったのか。

(19) 委員長はラッセル訓練に出発した後、各班の行動をどの程度見守っていたか。また、その時点で各班のラッセル訓練のコースをどの程度予想していたか。

(5/28の説明会ではコースの確認はしていないと回答している)

(20) 各班が樹林帯の中をキックステップで登っているときに、委員長は何をしていたか。そのとき各班の行動についてどのような思いを持っていたか。

(21) 委員長は、7年前の雪崩事故について、どの程度知っていたのか。

(22) 今回の計画変更の判断のときに、7年前の雪崩事故のことは考えなかったのか。

(23) 計画変更について、登山専門部長や高体連会長に連絡するという考えはなかったか。それはなぜか。

計画変更は3名で話し合い決定したが、専門部長、さらには高体連会長には連絡をしていないと聞いている。

3 実技講師打ち合わせについて、お聞きします。

(1) 3名が実技講師打ち合わせで発言をしているが、それぞれどのような内容の発言をしたのか。

(2) 第2グレンデ奥は雪崩の危険があるので立ち入らないという指摘は誰がしたのか。

- (3) 「スキー場周辺」という言葉を使っているが、具体的にはどの範囲であるか。
- (4) この時点（講師打ち合わせ）で「スキー場周辺」には樹林帯は含まれていたのか。
- (5) この時点（講師打ち合わせ）で「スキー場周辺」には樹林帯の先は含まれていたのか。
- (6) この時点（講師打ち合わせ）で、雪崩の起こった場所は視界不良で見えてなかったと証言している。見えてなかったということは、そこは危険であるという意味ととらえられるが、そうした認識をもっていたか。
- (7) 講師打ち合わせのときに、顧問の誰かが「雪が多いから十分に気をつけよう。あまり上には行き過ぎないようにしよう。」といったと証言があるが、その発言を聞いたか、聞いたとき、何を感じたか。

4 無線通信について、お聞きします。

- (1) 講習会等での無線通信ですが、普段はどのようなときに連絡し、どのような会話がなされていたのか。
- (2) この春山安全登山講習会の2日目以降、猪瀬委員長はどのようなときにどのような通信をしていたか。
- (3) 3日目、事故前までに、猪瀬委員長は誰とどのような通信をしたか。
- (4) 猪瀬委員長は、ラッセル訓練開始の後、各班講師から活動状況などの情報を受信したか。
- (5) 本件講習会では、無線通信をどのようなときにどのように使うか、講師たちに説明し、共通理解をさせたか。

5 本部の役割等について、お聞きします。

- (1) 本部は何のために設置されるのか。本部は何をするところか。
- (2) 27日当日、本部は具体的に何をしたのか。
- (3) 26日夕方に講師打合せを持っていないのはなぜか。
天気の変化や例年にない積雪など、翌日の登山に向けた打ち合わせは不可欠であると考えるが、打ち合わせをしていない。
- (4) 講師打ち合わせは、どのような考えで行っていたのか。
翌日の予定の確認、参加生徒の体調確認、現場状況の変化など、講師全員による打ち合わせが、指導者の意識や行動の統一に必要であると思う。指導者の資質向上、弱者や経験

のない者への配慮の点からも、指導者全員参加による意見交換の場が必要である。本件講習会ではそうした考えや意見はなかったのか。

(5) 本部と各班の通信が定期的に行われていれば、樹林帯を抜けて登る第1班の行動について、助言ができたのではないか。

(6) 本部の設置場所は、どこがよいのか。

(7) 本部は誰が担当するのがよいのか。

(8) 各班講師が互いに連絡し合うことがあれば、第1班の下山が早まった可能性があると思うが、どう考えるか。

第2班講師は、自分の班が樹林帯を抜けることをさせずに、下山に向かわせている。しかし、同じ学校に勤務する年下の第1班講師に何も連絡をしていない。こうした関係は1～5班の講師たちにも当てはまる。互いに連絡し合い自分の判断に生かすという助け合う関係が見られない。その結果、各班の行動は講師の判断のみで決定され、だれも止めてくれない。こうしたことが第1班の下山のタイミングを誤らせることになる。

(9) 雪崩発生直後に現場やその付近にいた先生方（指導者）が本部への連絡と同時に警察等への救助要請をしていれば、救助隊到着が早くなり、救えた命もあったのではないかと考える。こうした個人からの直接救助要請をすることについて、委員長はどのように考えていたか。

(10) 実施要項（具体的計画案）は作成してあったか。作成されなかったとするとそれはなぜか。

(11) 参加者名簿（班別名簿）は作成してあったか。作成されなかったとするとそれはなぜか。

(12) 緊急時の連絡網は作成してあったか。作成されなかったとするとそれはなぜか。

6 登山専門部委員長の職務関係について、お聞きします。

(1) 下見（事前調査）は、いつごろ誰と行ったか。どれくらいの時間をかけたか。どういうところを調査したか。

(2) その結果は記録されたか。調査結果は、実施要項を立案する上で、どのように反映されたか。

(3) 事前調査では、雪崩についてどのような調査をしたのか。

(4) この講習会の計画が登山計画審査会で審査されなかったことについて、どのように考えていたか。現在はどのように考えているか。

講習会という名目のため、登山に関する多くの手続きが省略されている。登山計画審査会の審査も受けていない。50名近い生徒が茶臼岳登山をするのに、審査会の審査を受けない

というのは、登山専門部の驕慢な態度だ。余りにもご都合主義だ。

(5) 入山届けについて、どのように考えていたか。現在はどのように考えているか。

(6) 今回、地元関係者、警察や消防、病院などへの連絡は入れていなかった。このことについて委員長はどのように考えていたのか。

積雪期の安全登山には、地元山岳関係者との連携が不可欠であると考える。

(7) 27日茶臼岳登山の日の引率教員の数が一番少ない状態になっていた。委員長としてはどのように考えていたのか。

(8) 登山中止の判断は正しかったのか。

(9) ラッセル訓練への変更は正しかったのか。

(10) ラッセル訓練への変更は、今まで足を踏み入れたことのない樹林帯で計画にない新ルートを使うことを意味している。あの気象条件や地形的条件の中で雪崩の危険性がある場所に入ることの判断である。明らかな状況判断ミスである。予定以外のコースを使うことに危機意識がない。自分たちだけの経験にだけ頼った危機意識の欠如が判断を狂わせたと言える。このことについてどう考えるか。

本件講習会は、登山を中止したことで予定ルートは使わなかった。しかし、代わりにラッセル訓練で事前調査もほとんどしていない、これ余り使った経験のないルートを、キックステップで登っていくことになった。この予定にないルートを使う判断をしたことが、雪崩危険地域に入っていくことになった。

(11) 教員仲間同士による講習会の運営が、手続きの省略や慣れによる確認や丁寧な説明を必要としない仕組みを作り、危機管理や安全対策の欠落を招いたのではないかと思うが、どう考えるか。

本件講習会は、各学校の山岳部顧問が必要に応じ、臨時的に集められた組織体が運営している。共通の目的を持った教員仲間であることが、強味にも弱点にもなっている。高校生を常に指導している教員同士であるため、指導内容や指導法については細かな打ち合わせをしなくても、各顧問に任せておけば大丈夫という意識や感覚が知らぬ間に醸成されている。そうした感覚は、学校の各教科担当教諭や部活顧問に一任する形と同じである。分任方式である。学校がそうした分任方式で成り立つのは、細部まで計画されたものがあるからである。目標や指導内容、指導時間などの共有化ができているからである。

本件講習会の執行部には、教員以外の外部指導者が含まれていないため、丁寧な説明を必要としない。すでに分かっていること、知っていることは確認作業をしなくても各顧問が自主的な判断で、活動が成り立っていく。分任しておけばやってくれる。

この傾向が長く続くと、大事なことも省略あるいは簡略化されていくことになる。同じ立場で仕事をしている仲間なので、分かっていることを前提としている。こうしたことにより、

生徒に接する指導者の認識と判断に多くを任せる形で運営されていく。下にやらせる運営と
いってよいだろう。日常的な場面では機能していくが、危機的、緊急的な場面では本部が役
割を果たせず、危機対応ができない安易で杜撰な運営が日常化する。

仲間同士の慣れによる危機管理の欠如を改善するのは、抜本的な改革が必要である。危機
意識の向上、危機対応、危機管理について、あらゆる場面を想定して対応できる資質と能力
と意識を育てることが重要である。特に、雪崩事故を防ぐための教育が徹底して行われなけ
ればならない。

7 7年前の雪崩事故について、お聞きします。

(1) 猪瀬委員長は、平成22年3月27日の郭公沢最上部での雪崩事故について、どのような場
所で、どのようかかわっていたのか。

その時雪崩事故を見ていたと聞いている。

(2) この雪崩事故について、登山専門部の関係者において、どのような認識や教訓が共有されて
きたのか。

第一次報告書では、7年前の雪崩については、その後登山専門部の委員会等の関係者で事
実が共有されてきたと記されている。

(3) 渡辺前委員長から委員長職を受けるとき、7年前の雪崩事故について、何か事務引継ぎの中
で説明があったか。

(4) 7年前の事故は、その場所固有の雪崩事故ではなく、春山安全登山講習会の雪山登山では、
どこでも条件がそろえば起きる可能性がある雪崩事故であり、茶臼岳での雪山登山の危険性を
示した事例だと解釈できる。当時、猪瀬委員長は、こうした考えは持たなかったのか。

平成22年3月の雪崩事故は、本件と同じ春山安全登山講習会での事故で、当時の第6班
の講師と顧問が沢の上部のやや急な斜面を通過する訓練のためにロープを張っていた際に、
顧問がルート工作のために斜面を下降しているとき、体重のかかったロープが斜面上部に食
い込んだことにより発生したと証言されている。斜面の雪面に負荷がかかったことにより発
生した雪崩である。開催時期、同じ茶臼岳、やや急な斜面、人が入ったことにより発生した
など、本件講習会と条件が酷似している。

(5) 7年目の雪崩事故から、安全な雪面であると思えるような斜面でも、バランスが崩れること
により、表層雪崩が起きることが、茶臼岳で大いにあり得るという教訓を導き出し、広く周知
していたならば、今回のラッセル訓練への変更にも大きな影響を与えたと考える。猪瀬委員長
はこのことについてどう考えるか。

8 春山安全登山講習会について、お聞きします。

(1) 春山安全登山講習会は、栃木県内の高校生にとって本当に必要な講習会であるか、検討すべ
きだと思うが、どう考えているか。

検討すべき理由は以下である。

- 長い歴史をもつ安全登山講習会であるが、絶対に起こしてはならない雪崩事故により 8 名の死亡者をだしてしまった事実は非常に重大だ。同じスタイルでの春山安全登山講習会の開催は、遺族、被害者は絶対に賛同しない。
- 雪崩に遭遇するか、回避できるかは、その危険場所に入るかどうかで分かれる。その判断は最終的に各班講師に任されていた。班の講師の判断には、雪崩に対する知識や状況理解、危機意識や安全管理が深く関わる。計画変更決定者の 3 名だけの問題ではなく、登山専門部全体の問題だ。同じ感覚を持つ指導者が講習会を運営することに、遺族等は納得できない。
- この講習会自体がいくつもの矛盾を抱えて継続されてきた。例えば、最も講習を必要とする 1 年生は参加していない、春山や夏山より講習会の方が積雪が多くより危険性が高い、雪山登山講習で夏山安全登山を学ぶ、生徒と経験の浅い顧問がともに受講者、積雪期の安全登山で何を学ぶのかが不明瞭などがあげられる。
- 多くの学校の生徒を集めて行う良さは、初日の全体講義以外あまりない。第 2 日目以降は学校別の活動である。実技指導は各学校の実情によって違っている。第 2 日目以降は各学校が単独で行っても同じ成果があげられるだろう。
- 多くの学校の生徒と顧問が集まって実施するためマイナス面が出てくる。一つは責任者が曖昧になることだ。今回も高体連会長や登山専門部長が責任者であるが、直接的にはかかわらない。各校が主催者になれば、校長が責任者になり、安全管理や危機管理がより徹底される。二つ目は、今回のように生徒と講師が別学校という班編成ができてしまい、生徒との信頼関係ができないまま指導するマイナス面が大きい。

(2) 高校生の雪山登山は原則中止すべきだと思うが、どう考えるか。

7 年前にも同じこの春山安全登山講習会で人為的な要因である雪崩事故を起こし、教員と生徒が被害にあった。そのことが広く県内山岳部顧問や登山専門部に教訓としては残されず、また今回も同じように人為的な誘発で発生した可能性のある表層雪崩を回避できず、8 名の若い命が失われた。この事実が生徒や保護者に与えた影響は計り知れない。

また、文部科学省では以前から冬山登山で「原則高校生の冬山登山は禁止」の通知を出しているにも関わらず、県内ではいくつかの学校が雪山合宿と称して冬の登山を実施し、更に本件の講習会で雪山登山を実施している。講習会という名目で実施し、必要な基本的手続き等も省略し、装備や準備も十分に整っていない状況で、未熟な高校生を雪山につれていっている。

こうした登山専門部の軽薄な判断と行動は、生徒の命の重みや雪山で生徒の命を守ることがいかに難しいことであるかを忘れたような思考と行動である。

基本的な安全確認や危機管理といったことを自分たちの経験則だけに頼って講習会を運営し、生徒を指導してきた雪山登山は、原則中止すべきである。

9 登山専門部は何度でも自分たちの判断と行動について何が足りなかったのかを検証しなければならない。このことについてどう考えるか。

特に、今回の事故に至る第 3 日目の朝のラッセル訓練へと決まっていく流れをもう一度見直し、どこに問題点があるのか、何が足りなかったのか、どのような知識が必要であったのか、何がそうさせたのかなど、再度問題点を明らかにすることが、類似の雪山登山における事故防

止には欠かせない。

高体連や登山専門部は、検証委員会にだけ任せないで、今回の雪崩事故を生み出している背景と要因を調査検証しなければならない。問題は指導者の知識や技術だけでなく、その判断と認識や意識の問題であると内省し、指導者の集まりである組織の体質や危機管理能力についても調査分析を行い、真剣な検討と徹底的な改善を図らなければならない。それができなければ、また同じような判断と認識による事故を起こしてしまう

10 最後に

(1) 今回の雪崩事故について、現時点での猪瀬委員長の見解をお聞きします。

ア 雪崩事故はどのように起きてしまったのか。

イ 何が足りなかったのか。

ウ どうすれば回避できたのか。

(2) 猪瀬委員長は、今後も高等学校で山岳部顧問として指導するつもりか。